

〒260-0031 千葉県千葉市中央区新千葉2-17-6
サンコート新千葉102号
E-mail:kidchiba@lily.ocn.ne.jp
TEL:043-301-7262 FAX:043-301-7263
発行責任者：特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター
2022年7月10日発行 第100号 1部100円 <https://chiba.gekijou.org/>



2022年度

子どもを真ん中にして実施した2021年度

「あそび」や「わくわくドキドキ体験」を止めてはならない！
子どもの笑顔あふれる文化的な生活環境づくり



子ども劇場千葉県センターの2021年度は、長期にわたる新型コロナウイルス感染症予防対策の様々な制限下の中、丁寧に関係をつくりながら、計画したすべての事業を実施しました。子どもの権利条約の視点に立ち、子どもの心身の成長に大事なことを見失わず、ミッション実現・目的達成を目指しました。その原動力は子どもからの様々なメッセージです。

勇気を出して不安な気持ちを話してくれた「チャイルドライン千葉」や「ママパパラインちば」には、コロナ禍でより孤独感や緊張感で疲弊した声や希死念慮の声も届きました。気持ちを共感的に受け止めることで心が緩み、一歩前に進める言葉に変わります。多くのボランティアに支えられて傾聴ラインを開設することで、社会の課題解決の一翼を担っています。

子どもへの芸術的アプローチは、「あそびを止めない」「わくわくドキドキ体験を止めない」をいっそう推し進めました。「学校への芸術家派遣事業」92校、QOL向上のために病院、県内すべての児童相談所や児童福祉施設18か所を実施し、久しぶりの子どもたちの笑顔に周りの大人もホッとする瞬間でした。訪問できなかった病院へ、ワークキットの贈り物やオンライン芸術交流も試行し、次への展望も開けました。

乳児院3か所の「はじめてのおしぼい」や、県内17か所での「0歳〜2歳と親が笑顔になるワーク」は素敵な出会いの連続でした。コロナ禍に生まれた赤ちゃんが表情やしぐさで豊かに語り、親も愛おしさで楽しさで日常の疲れやストレスから解放され、幸福感を感じていました。6か所の「施設スタッフの支援力向上講座」も好評で、行政や地域と連携して取り組み、子育て支援にアートの活用が有効であると確認し合いました。

自由に感じ、ありのままの自分をい々と受け止められる文化芸術の世界。子どもの考えは無量大。子どもの表現する力を信じる、答えは子どもの中にあります。「芸術は遊び、生きる力の根っこになる」と、子どもの笑顔から教えてもらいました。

「こども基本法」「こども家庭庁設置法」が6月に国会で可決し「子ども家庭庁」は2023年4月発足に向けて準備が進められます。子どもを真ん中に、子どもが自信をもって生きられる社会になるよう期待します。

子ども劇場千葉県センターの2022年度は、事業を通して子どもや養育者の声を聴き、行政や地域の団体・人のネットワークを生かしながら、子どもの声を社会に発信し、共感者や支援者を広げていきます。

(理事長：宇野京子)

2022年度(第25年度) 通常総会終了

日にち：2022年6月16日(木)
時間：12時30分～14時00分
場所：千葉市民会館特別会議室2
出席者：正会員45名中45名出席(うち委任・書面表決11名)
すべての議案が全会一致で承認されました。
■2年間の事業の重点課題として、全ての事業に、子どもの権利条約の理念と子ども観を入れ込んでいくことが確認されています。

2022年度の事業計画

●文化芸術を活用し、子ども自身の自己肯定感・非認知能力を獲得する活動

①文化庁受託令和4年度文化芸術による子供育成推進事業
*県内80校(予定)で実施する芸術家派遣事業

②子どもゆめ基金助成事業
*「病院や児童福祉施設の子どもたちが自己肯定感を高めるあそび・交流ワークショップ体験」18か所

③子どもゆめ基金助成事業
*「出前で開催する子どもあそび*アート*交流体験」2か所

④赤い羽根共同募金助成事業
*「0・1・2・3歳児が出会いはじめてのおしぼい」乳児院3か所

●文化芸術を活用し行政・地域連携の子育て支援活動
「乳幼児と養育者の笑顔Withアール」事業

①社会福祉振興助成事業(WAM)
「0歳〜2歳児と親の笑顔・支援力を豊かに推進するネットワーク強化」事業 25か所

●子どもや養育者に寄り添い「傾聴」による当事者を支える活動
①チャイルドライン千葉 ②ママパパラインちば

●ネットワーク事業
子ども系NPO、行政、個人、こども人権ネットワークとの連携



講師：大森靖枝さん
うさぎの森企画主宰
通称：おーちゃん

ほっこりぽかぽか みんなをつつむ やさしいじかん

プッパッパァァー 会場に可愛らしいおもちゃのラップの音が鳴り響く。講師の大森靖枝さんが人懐っこいいつもの笑顔で微笑んでいる。皆も一瞬にしてその微笑みにとらえられ頬が緩む。一瞬にしてみんなのハートを掴み「今日のおはなしはなんだろう？」と期待に膨らませるおーちゃんのトークが始まった。

長年在籍した「劇団風の子」をこの春定年退職し「うさぎの森企画」という個人でのお仕事を始めた大森靖枝です。と言ってもやることは今までとたいして変わらないのですが……。

私は幼児教育や、子どもについての難しい学術的なことを学んだことはありません。でも長年たくさん子どもたちと、いろんな形で触れ合ってきて現場で、子どもたちから学んだものがたくさんあります。風の子にいたときから「心をコンクリートにするなよ」を言われてきて、つまり感性や体調によって1の次が2とは限らないってことをずっと心に留めてこの仕事をやってきました。

そうそう そうだよー

その中でいろんなことに気がついたり発見したりしてきたけど、その一つに「子どもは大人に似る」というのがあってね。例えばいろんな場面で「子どもと先生って似るんだな」ってずーっと思ってた。

学校、保育園、幼稚園、それぞれクラスのカラーがあるでしょう？それってクラスの先生に似ているのよ。子どもたちの雰囲気も似るの。落ち着いて「ピッ！」とした先生のクラスの子は「ピッ！」となるし、先生が「ワイワイガヤガヤ」しているクラスは元気でガヤガヤしている。誰がそうなりなさい、そうしなさいと教えるわけではないんですけど、子どもの感じ取る力で似ているんだと思うのです。

立ち姿、オーラ、表情、子どもたちは『瞬間キャッチ力』で似てしまうの。 『空気をつくる』のが子どもをリードする人の大事な仕事

■10年くらい前テレビで面白い実験をしていたの。幼稚園にテレビ局が入ってね、普通の格好したアナウンサーみたいな男の人がお部屋で自由あそびをしている園児の中に、何にも言わないで入っていくの。もちろん先生はいない。子どもたちは「だーれ？」「誰だよー？」「なにしてるのー？」等々寄っていき三々五々にしゃべりかけるわけ。そして「今から園庭で何かやるから出てきてくださいね」って一言だけ言って部屋から出る。
さてここから問題です。子どもたちはどうしたでしょうか？
『1、全員出た 2、半分出た 3、誰もでなかった』はいっ！1と思う人、手上げて！2の人、3の人！

「答えは～全員出たのよ。「なんだよー？」「なにやるんだー？」それはもうワイワイ言いながらぐちゃぐちゃに走ったりしながら園庭に出たのよ。」

■テレビ見ながら「子どもはシンプルだー」と。でね、次のクラスで実験は続くの。こちらはびっしりと決めた服を着た、まるで結婚式にでも行くようなスタイルのお兄さんがやはりスーッと入ってきて、同じように「園庭に出てください」と一言。さて子どもたちは出たでしょうか？

「答えは～何と全員出たのよ、こっこのクラスも。」

皆さん「えっ!？」とびっくりしたでしょう？ 子どもたちはね、ビシッと決めたスタイルの男の人に声かけられないの。前のクラスの「こいつ誰だあー？」興味言葉になって次々出るのとは大違いで声もかけられないのよ。

でね、どうやって外に出たかという、クラスってリーダー格の子どもっているでしょう？しっかり者の。その子がね「園庭に出ておいでって言うのよ」て言うのね。すると次のリーダー格の子が「そうだよ、そう言ったよ」と園庭に向かうの。他の子は首傾げながらもリーダー格の子についていって結局全員園庭に出たのよ。
つまり立ち姿、オーラ、表情、子どもたちは『瞬間キャッチ力』で似てしまうの。

言葉も言い方も動きも同じなのに、雰囲気だけで受け取るものが違うしそれに対しての子どもの動きも違って行く。だからもし子どもたちに「こうなってほしいな」と思うなら、その雰囲気になら自分がなるのが一番いいと思ってるのね。『空気をつくる』のが子どもをリードする人の大事な仕事とっています。

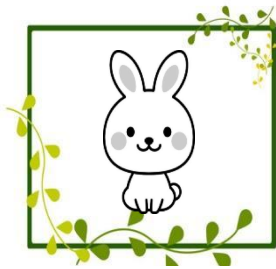
安心のコップのお話をするわね

子どもたちが劇やワークショップに参加しに来た時、なかなか入ってこれない子っているでしょう？大人はせっかく来たのにとか楽しいのにとかいろいろ思うものよね。「やろうよ」とか言ったりしてね。

でも、「今日はお母さんの意志で来ているのだから、やりたくないことはやらせなくていいの。やりたくなったら来てね」って言うの。参加型のワークショップをやると、端っこマットにおかあさんと座ってずーっと見て話も聞いていて、終わった後、話の内容に「よかったね、お母さん」と気持ちを表す子もいれば、終わる直前に参加して「ねえ、おかあさん、もう終わったの？」と尋ねる子もいるのよ。輪の中には入りにくいんだなーと見てとれる子がいた時、ワークのくまこさん役が倒れて子どもたちが薬をぬってくれる場面で、足をその子の方にちょっと出してもらったの。そうしたらくまこさんの足にチョンって薬を塗ってくれたの。

『させてやろう』じゃなくてね。子どもにはそれぞれのペースがあるの、参加の仕方があるのよ。端っこなんかにいると、よく大人が誘いの声を掛けるでしょ？その人は1回しか掛けていなくても子どもからしてみるとそこにいる大人が1回ずつ声かけたら、かけた人数分誘われたことになるのよ。無理にやらなくてもいいのよ。その子が安心してできる雰囲気があることが大切。

無理にやらせなくてもいいのよ。
その子が安心してできる雰囲気があることが大事！



共感を楽しむワークショップをみんなで行きましょう。

「この人すごい、この人おもしろい、私ってすごい」これが大事。

子どもに「共感すること」が非認知能力を育てる

そして「安心・信頼・自信」で心のコップがいっぱいになると「やろうよ」と思うのよ。これが非認知能力を育てることに繋がっていくんです。

子どもと何かやるときは自分自身が楽しいことがとても大切。そして子どもの声を聴く、目で語る、感じる、見守る事をいつも心に置いて接しているの。

脳科学の第一人者、玉川大名誉教授の塚田稔先生のお話を聞いた時、一番わかったのは『共感』が大切ということ。さらに国が打ち出さないといけないほど非認知能力が大事ということを言われていて、このことは国を超えて地球の問題だと話されたの。「ああーっ、そうなんだー」って、「共感なんだー」って。大切なんですよ。

2人でワークショップ

- 二人で「1・2・3」というあそび 「これは相手をよーく見ていないとできないのですよー」



「お互い交互に私が1といったらあなたが2、次に私が3これを繰り返すだけ、簡単でしょ」



「次は2の時に手をあげるポーズを付けるの、いい？」



「今度は2の時、声を出すの、ガオーッとかね」

- 「一緒に探し」互いの一緒の場所を見つけて共感するあそび。

「眼鏡をかけている」「結婚している」「靴を履いている」等々どんな一緒を見つけて共感できるか。相手をよく考えて一緒を見つける。

- 「ポジティブ会話とネガティブ会話ごっこ」ピンチをチャンスにする会話。『褒められる嬉しさ』を実感するあそび

「社長大変です！〇〇が大変です！」と社員役がネガティブな難題を持ってくると社長役はそのピンチをポジティブな言葉で解決する。と「さすが社長！」とおもいきり褒め言葉をもらう。『自分で自分を褒めること』『褒められる嬉しさ』を実感するあそび。

心がたくさん揺れる、笑いすぎておなかの皮がよじれる、大森さんのリードで頭が柔らかくなるめったに出来ない楽しい時間を過ごすことが出来た。感じることの楽しさ、共感から得る安心、受け止めてもらえることの信頼や幸福感、褒められることの心地よさ、子どもたちの持つ素晴らしい感性に少しでも近づけたかな、と子ども時代を思い出した大人たちだった。

歴代3人の理事長が 「使命」や「おもい」を語り合う

ミッションからはじまり、ミッションに戻る 事業を創り続けた23年 つないできた 子どもの権利条約の理念と チャレンジ精神

情報紙
「ぐるっと房総」
100号発刊

「千葉県内の子どもの発達権を保障する生活文化環境を創ります。」

法人設立の際、何度も何度も議論し深めたこのミッションには、一文字一文字に熱い思いと子どもの権利条約の理念が込められています。3人の理事長は、それぞれにこのミッションを深く捉え、事業開始の時は必ずミッションを確認し、最後にミッションをどこまで実現できたかに戻り、事業推進のPDCAのサイクルを確認しながら事業をすすめています。理事長の推進力と揺らがない安定感が、子ども劇場千葉県センターを成長させました。また、これまで今現在も、たくさんの事業を手を抜くことなく実施している理事の「しごとっぷり」と「チームワーク」は、宝であり誇らしいことであり、最大の強みだと、3人の理事長が共通に語っています。(中村 記)



1988年に「千葉県子ども劇場おやこ劇場協議会」を立ち上げ、1998年に改組して、子ども劇場千葉県センターに。1998年5月28日に(特) 子ども劇場千葉県センターを設立しました。千葉県センターのもう一つの顔である「ぐるっと房総」が、今号で100号になり、掲載した記事から法人の歴史や大切にしてきたこと等を、歴代3人の理事長のトークからひも解いてみました。

創成期(1999年～2003年) 理事長 武智多恵子さん

時代をキャッチしてNPOの事業を創るのが よろこびであり うれしかった！



子ども時代、戦争と引き上げを体験した私は、絶対にはいけな戦争をしては、生涯、平和を希求していきまます。

私の理事長の時代は、任意団体からNPO法人への大転換期でした。阪神大震災を機に、市民やNPOの存在が注目され、国会で全党一致で法案が通り、法人格を得ることができるようになりました。それは画期的なことだったのです。

子ども劇場を千葉県で創立した1970年代から、任意団体時代が長く続き、もどかしさや限界も感じていた頃でした。市民の力が認められ、行政と肩を並べて社会や子ども諸課題を解決する時代がやってきました。来たという「うれしさ」と、社会から認められる「よろこび」でいっぱいでした。

千葉県庁に何度も足を運び、やっと受理された時は、思わず手をたたくて喜び合いましたね。県内で4番目でした。NPO法人として前例もなく、お手本もなく、ただ夢中だった私の時代、その後、それを継承し繋いでいった理事長さんこそ、大変だっただろうと思いますね。

チャイルドラインやママ、パパライン等、創設への着眼点は「すごい！」ことでしたね。

1996年の全国大会から「子どもの声を聴く」呼びかけや学習が繰り返され、千葉では開設したいという思いが強く、着々と準備しました。1999年5月5日～7日まで「子どもの声を聴く」48時間チャイルドラインが、全国14箇所で開催され、2330件を受けました。

ママパパラインは、当時から全国的に虐待の増加があり、親や家庭支援も必要だと専門家からの後押しもあって、東京で7日間創設。その後千葉で継承し、常設や全国展開へつなげたのですね。

子ども専用のラインと大人のためのヘルプラインの必要性を痛感したことから始まった「チャイルドライン千葉」や「ママ、パパラインちば」は、千葉がけん引役を担ったと思います。今でも大切な事業として続いていることが感慨深いです。

乳幼児やその親対象の支援活動等も始まっています。「鑑賞の社会化」を模索する一歩を踏み出した時代です。

- 1999年チャイルドライン千葉「子ども電話」創設↓現在まで継続
- 2002年「ママラインちば」創設↓現在まで継続
- 「第一期 幼児とお母さんの表現あそび」
- 三代交流「ようこそ大先輩」
- 千葉県高校生交流会・全国高校生交流会
- 海外招聘公演事業

成長期・発展期(2004年～2012年)理事長 岡田泰子さん

ネットワークが広がってワクワクドキドキ！ おもしろおかしくやっていた！



一番に平和であること。「シンク・グローバリ・アクト・ローカリー」広い視野で学び考え、地域で動く。身近な社会(家庭・地域)身近なフィールドを大切にしたいです。

中間支援のNPOとして何をやるのか？を、いつも考えていました。千葉県センターの三役の経験もなく、自信もなかったのですが、力のある理事の方々と、おもしろおかしくやっていた自分を思い出します。エクセレントNPOの市民賞を頂いた時、「女性のパワーを感じる」と評価されましたね。

NPOは「人・もの・金」と言われ、私は「人」への可能性や個々の特性を活かすことを心がけました。次につながる若い世代を育てる使命もあり、宇野さんにバトンタッチできた時、ホッとしましたよ。

事業が広がり、専門家やアーティストと繋がってネットワークを創った時代です。毎日がワクワクどきどきするような感じで、何をやっても楽しく、あまり失敗を恐れることもなかったですね。事業の広がりと共に、本当に忙しい日々が過ぎました。

堂本暁子さんが県知事になり「NPO立県ちば」を掲げ、市民とのパートナーシップのもと、県の様々な施策にかかわる機会が増え、NPOへの風が吹いていましたね。ラッキーな時代でした。

行政とNPOとの連携が大きく進んだ時代で、千葉県の協働事業提案に果敢にエントリーし、たくさんの事業を起しました。NPOとして試され、学びながら力をつけました。

2008年に「笑顔の贈り物事業」がスタートしましたね。「笑顔」「贈り物」のフレーズが素敵で、助成金も何度も獲得して、社会の共感を得ました。子どもの権利条約の子ども観が事業をすすめる指針でした。

- はじめてのおしぼい↓現在まで継続
- 子育て応援シアター
- 子育て応援者養成講座
- 地域子ども教室推進事業
- 学び合い支え合い地域活性化推進事業
- 子どもとメディア 子ども生活リズム
- 病気と向き合う子どもが笑顔になる贈り物事業↓現在まで継続
- 出会う・遊ぶ・子どもの舞台芸術体験
- ひろば1Nちば↓現在まで継続
- 子どものアートステージファンド
- ひらけ！ゆめステージ
- SNS「あみつぴー」を活用した家庭教育支援調査事業
- チャイルドライン全国フォーラム
- 県民活動基盤強化事業受託

発展期・成熟期(2013年～現在) 理事長 宇野京子さん

何とかなる！の精神 大事な事業をレベルアップしながら継承 新たな事業開発



千葉県内のすべての子どもを視野に入れた事業づくりをしたい。社会発信の機会をつくり、事業者への理解者を広げていきます。

NPOの法人化を千葉県センターが積極的にすすめていた頃、私は市川おやこ劇場(現 市川子ども文化ステーション)の運営委員長でした。各団体がNPO法人として自立して対等な関係になるんだという、法人化のイメージの説明を受けた時「千葉県センターは私たちを見捨てるの？」という疑問や不安をもったことを覚えています。(笑)

先輩理事長が偉大で、「私どうするの？」という気持ちが強かったです。これまでつくってきた事業を大事にしながら、外とつながることを重点的にやってきました。

「私、できな〜い」と言っていた私ですが、まわりがおだてて上手で、何とかなると思えるようになり、いつも理事の方々をリスペクトしながら輪をつくってきました。

先輩方が開拓したとても大事な事業を、どうレベルアップしながら継承していくか、いつも課題をもっています。「笑顔の贈り物事業」が、病院から始まって、今では県内7つの児童相談所、児童福祉施設、放課後デイサービス等に実施場所

が広がったこと、実施のための財源を助成金だけでなく、社会からのカンパやクラウドファンディング等にチャレンジしました。

ITの活用に積極的に取り組んでいます。ドロップボックスの活用、LINEはもちろんのこと、コロナ禍でのオンラインZOOMでの会議、グーグル活用等々、苦手意識のある理事さんたちも奮闘していますね。

8年間続いている文化庁受託「芸術家派遣事業」は、芸術文化活動の社会化を一気に促進しました。学校での実施は90校に及び、教育的視点からも、芸術家による体験ワークショップが高く評価されています。

2020年、改めて0歳から2歳の育ちの重要性に着目した支援事業を、市町村との連携事業として立ち上げました。市民や行政の参加のもと、成果報告会を開き、提言と成果や課題を社会発信しています。

- 放課後子ども教室(八千代市村上北小)
- チャイルドライン・ママパライン応援チャリティー
- 傾聴の文化を広げる講座
- 情報発信戦略プロジェクト↓継続
- 2015年 文化庁受託「芸術家派遣事業」↓現在まで継続
- 2020年 0歳〜2歳児と親対象文化芸術を活用した連携と協働の子育て支援事業(WAM助成事業)



「こども基本法」「こども家庭庁設置法」 2022年6月15日成立!

～成立を歓迎し、子どもの権利を基盤とする施策がいつそうすすむことを希望します～

「こども基本法」「こども家庭庁設置法」が、2022年6月15日に可決成立しました。「こども家庭庁」は2023年4月に内閣府の外局として発足します。子どもを真ん中に据え、子どもをめぐる様々な課題に対し、中長期的な視点で一元的にすすめる「子ども政策の司令塔」として、縦割りの弊害を克服しようというものです。子ども政策の基本理念を定める「こども基本法」には、子どもの権利条約の精神にのっとって進めていくことが明記され、国連「子どもの権利条約」の批准から28年、ようやく基本法に取り入れられたことを歓迎します。また、課題も浮き彫りになっています。【課題】①幼稚園の書簡が文部科学省に残り「幼保一元化」の見送り。②小学校など初等教育の権限も文科省に残された。③子どもの人権擁護の調査報告ができる「子どもコミッショナー」は先送り。④明確な財源確保がされるか?

2022年度、子どもの権利条約の理念・子ども観を柱に据えている子ども劇場千葉県センターの事業がスタートしました。コロナ禍の長期自粛生活を起因とした、危惧していた子どもたちへの影響が、チャイルドラインの声にも、学校の先生方からも出始めています。一日でも早く、あそびや体を使った様々な体験の場を、取り戻していきたい...という思いを込めて「事業を通じて実現したいことや願い」を発信します。

令和4年度(2022年度)独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業



「0～2歳児と親の笑顔・支援力を豊かに推進するネットワーク強化事業」

プロのパフォーマーにより、2年間で延べ1,098人に届けられた芸術的アプローチによるワークは、赤ちゃんが生まれながらに持っている感情や意思やコミュニケーションの力を引き出すことを、出会った赤ちゃんが教えてくれました。また「百聞は一見に如かず」で、直接参加して観ることで、「赤ちゃんには力がある」ことを発見し、大人が「目からうろこ」状態で驚き感動しました。親子いっしょに笑顔で楽しみ、我が子の成長発達を感じ、愛おしさと幸福感につつまれ、癒されたことを、参加したお母さんがアンケートに答えています。芸術家による支援力向上講座は、子育て支援の現場のニーズにピッタリで、豊かで安心できる親子との関り方や専門性を高める内容が支援者に大好評です。WAM助成3年目となる今年は、「芸術は子育て支援の有効な手段」であり「0歳～2歳児とその親への重点的な支援と子育て施策への反映」を提言し、実現するよう行政に働きかけていきます。

令和4年度子どもゆめ基金助成事業



「病院や児童福祉施設の子どもたちが自己肯定感を高めるあそび・交流ワークショップ体験」

コロナ禍の長期化は、長期入院や、虐待など様々な背景を抱えて児童相談所や児童福祉施設で生活する子どもにとって、これまで以上に自由が閉ざされた環境となり、あそぶことや人とのふれあい、気持ちを発散する機会が失われました。どんな状況にあっても、安心して自分を表現し、ありのままの自分を認められたら、笑顔になり、ちょっと先の希望につながります。芸術家によるコミュニケーション遊び、音楽、ダンスや人形劇、地域の指導者による工作やあそびの交流は、子どもをまるごと受け止めて情緒的QOLの向上を応援します。

「出前で届ける子どものあそび*アート*交流体験」

プロの芸術家による芸術文化交流体験を、身近な幼稚園や市の公園等、広い空間で3年ぶりに2か所で行います。コマ回しやけん玉、ダンス、コミュニケーション遊び等、どのプログラムも工夫された内容で、子どもの「やってみたい」「あなりたい」の気持ちがあふれ出る光景に出会えます。思いっきり体を動かすと、緊張やストレスから徐々に開放され、遊びこんだ後、満足感と自信を得た子どもたちの顔は頬が紅潮して「いい顔」になります。さあ!コロナ禍で失った大切な成長の糧である「あそび」を、子どもたちに取り戻しましょう。

令和4年度文化庁受託事業 文化芸術による子供育成推進事業～芸術家派遣事業～

子どもの舞台芸術分野の第一線で活躍中のプロの講師による文化芸術体験を、小学校や特別支援学校の体育館に出向き、90分間の授業を行っています。音楽家による美しい音色、表現者からのメッセージ、伝統芸能を身近に感じるような“本物”の体験などワクワクするような時間になっています。授業での実施は、該当学年の子どもたちが等しく参加でき、たくさんの発見をして自分の世界をひろげる機会となり、子ども同士の共有化も豊かに図ることができています。8年連続して文化庁から委託され、県内の学校からの評価を得て、実施希望の学校も広がってきました。学齢期に千葉県内すべての子どもたちが文化芸術体験を可能にすることが願いです。



令和4年度千葉県共同募金会の助成をいただきました。

寄付者の皆さまが共同募金を通じて福祉課題テーマを特定して寄付し、寄付額を団体への助成額に反映する取り組みです。【使途選択助成 テーマ②子育て、子どもに対する支援のための事業】に子ども劇場千葉県センターの3事業が選ばれました。頂いた助成金に感謝すると共に、課題解決に向けて取り組んで参ります。



「チャイルドライン千葉」をアドカードとポスターで小学生に知らせる

子どもが誰かに話を聴いて欲しいと思った時、安心して話ができる安全な場所の一つとなれるよう、電話とオンラインチャットに届く声に寄り添い共感的に話を聴かせてもらっています。長引くコロナ禍の中、先の見えない不安感を抱えながら、辛さや苦しさを訴える話が多く「分かって欲しい」「受けとめて欲しい」という声が胸に刺さります。子どもは話すことで、気持ちを軽くできたり、自分の内にある思いに気づいたり、どうしたいかを一緒に考えていく中で、自ら答えを見つけ出すことができます。子どもが持っている力を信じ、子どもを丸ごと受けとめて、次の一步を踏み出す心の支えになればと思っています。また、子どもたちには「ありのままの自分で生きていいんだよ!」ということを伝え、子どもから信頼される大人・チャイルドラインでありたいと思っています。声から見えてくる子どもの置かれた厳しい状況を社会発信し、その声を受け止める大人が地域の子どもの伴走者となるよう広げていきます。

18歳までならだれでもOK
うれしいこともかなしいことも、なんでもはなしていんだよ!

チャイルドライン千葉

0120-99-7777

通話無料(携帯・スマホもOK) オンライン相談は
まいにち ごく4時~ごく9時 はこちらから

主催: NPO法人 子ども劇場千葉県センター
後援: 千葉県教育委員会 千葉市教育委員会
このカードは赤い羽根共同募金の助成によりつくられています。



あなたをひとりにしない・させない! 「ママパパライン」

「ママパパラインちば」

子どもをもつママ・パパ・家庭の子育ての悩みや不安な気持ちを電話でお話
ぎします。なまえ・住所などはおききません。安心してゆっくりおはなし
ください。電話だからこそ何でも言える。気軽にダイヤルを!

043-204-9390

毎週金曜日 10:00~16:00
キャンペーン: 2023年2月13日(月)~2月18日(土)
6日間毎日 10:00~16:00

「ママパパラインちば」のアドカード・ポスターを当事者に届ける

カード配布等は、当事者に届ける情報発信の1つとして欠かせないことです。



ママパパラインは子どもを持つ親・養育者の子育てを応援します!
子育て中のママやパパ、養育者の悩みや不安に寄り添い共感的に話を聴く専用の電話です。受け止めることで養育者が安定した気持ちを取り戻し、養育者自らが、解決への力を取り戻し(レジリアンシー)、前向きに考えられるようになります。子どもの心配や、ご自身の辛さや苦しきなど、悩みや不安を誰にも話すことができずに一人で抱えていませんか。コロナ禍での長期自粛生活のイライラやコロナに対する温度差へのストレスも養育者の子育てをさらに辛くさせています。誰にも言えなかった胸の内や、押し込めていた気持ちを吐き出す場として丁寧に寄り添ってお聴きしています。些細な事と思わずにお電話してみてください。誰かに丸ごと受け止めて話を聴いてもらうのはうれしいものです。

0・1・2・3 歳児が会うはじめてのおしばい

豊かなあそびや文化に出会うことが少ない千葉県内の乳児院で暮らす乳幼児0・1・2・3歳の子どもたちに、プロの芸術家による文化芸術ワークショップを15年間届けています。赤い羽根の助成で実現できています。子どもたちはパフォーマーと目を合わせ、声や音に敏感に反応し、屈託のない笑顔を見せ全身で楽しめます。保育士さんたちは、子どもたちの真剣に集中して見つめる様子や、普段見せない表情に驚きを隠せません。保育士さんたちも、パフォーマーのあたたかい声かけに癒され、ほっとした時間を一緒に過ごします。ワークショップで教わったわらべうたや手あそびを、日常生活に自然に取り込み、生活の中にある芸術の力で子どもたちの非認知能力を育てていきます。どんな状況の子どもたちでも文化の享受を受けられる社会環境を整えましょう!と、発信します。

2022年度事業を通して、子どもたちや社会に今こそ伝えたいこと

「アートしよう 2022」



子ども文化最前線

(特)ならしの子ども劇場

青空のもと、子どもも大人も楽しい時間を過ごしました！

実施日：5月3日(火・祝)13:00~16:00 中央公園(プラッツ習志野内)
参加者：会員7人(子ども5/大人2)、一般56人(子ども32/大人24)
スタッフ：25人(大人17/青年6/高校生1/会員家族1)



事前に会員の子どもが作った看板



2階建てのmyハウス good!



親子で夢中で作ったよ!



好きな色をぬっちゃおう

子どもたちに思い切り遊びこむ体験をしてほしい、大人にもあそびの持つ楽しさを思い出し大切だと感じてほしい、との目的から「アートしよう 2022」を開催しました。

造形の材料として様々な大きさの段ボールとアクリル絵の具を用意し、公園を汚さないように使用エリアには事前にスタッフで貼り合わせて作成した大きな養生シートを敷きました。集まった親子は会員と一般合わせて63人。お父さんと子ども、お母さんと子ども、家族揃って、仲良し家族が集まって等々参加の形体は様々でしたが、始まると同時に一斉に創作がスタートしました。

ダンボールでどんな造形をするか、どんな色を塗っていくかなどは全く自由です。ゆっくり相談しながら作るグループもあれば、子どもたちの指示に答えお父さんやお母さんが奮闘して「家」や「電車」などを作っているグループもありました。

ひたすら色を塗っている3才くらいの女の子はとうとう自分の手や足にも絵の具を塗り始めましたが、お母さんもお父さんも止めるどころか「子どもも自分たちも汚れる覚悟で来たので大丈夫です!」と笑顔でした。

子どもどうして相談して創作を進めているグループにスタッフが話しかけると、「ここが窓でカーテンをかわいく描いた」「ここはぼくが作った」など工夫したところを話してくれました。また、あるお父さんは「子どもよりも僕の方が夢中になってます」と話してくれました。

次第に色々な形の家や恐竜、乗り物、お店などの形が出来上がっていき、公園の中に楽しい空間が生まれました。家で家族だけでは出来ないあそびの場を創ることが出来た時間でした。

(特)ならしの子ども劇場 栢まゆみさん記



青年たちによるオープニング



看板横断幕。参加者の作ったペイントと一緒に風にはためきました

編集後記：ぐるっと房総が発刊100号となりました。振り返って読み返してみると、多くの多彩な事業を実施し、毎年忙しくそれを楽しんでいたかがわかります。ミッション実現へのこだわり、理事の熱い思いや願いが紙面から溢れ出てくるようです。歴代3人理事長のトークでは、法人発足から23年間、理念がブレず、発展しながら繋いできたこと、そして戦争のない世界平和への願いが語られました。

